

名古屋の木材業を支えた力持ち

—名古屋の運河沿いのデリック—

■デリック(クレーン)の登場と果たした役割

かつて堀川沿いには沢山の製材工場があった。その付近の川面には大量の木材(丸太)が浮かび、船の航行にも支障をきたすほどであった。1950年代の古写真(右)を見てもそれが窺える。その川沿いにひととき高い構築物が立っている。これが丸太を陸揚げする際に使用するデリックと呼ばれるクレーンである。堀川にデリックが設置され始めたのは、1920年代から



堀川沿いのデリックによる作業風景
(中区柳川町、2002年筆者撮影)



中川運河にあったデリックの作業風景
(中川区山王1丁目、2002年筆者撮影)

が存在していた。製材所脇の川面には丸太が浮かぶ箇所が所々に見られ、時には丸太を陸揚げする場面に出会うこともあった。

■名古屋の運河で現存唯一となったデリック



堀川で唯一の現役デリック
(中区正木2丁目、2023年筆者撮影)

30年代にかけての堀川の護岸改修であった。特に左岸側が台地となっていたこともあって開削した護岸が急傾斜となり、丸太を人力で引き揚げるのが困難となった。そこで登場したのが動力駆動によるデリックであった。川面に係留される大量の木材の陸揚げでは、力持ちの機械として大活躍した。

■堀川をはじめ運河沿いに林立していたデリック

堀川沿いの製材所及び堀川の木材流送は、1959(昭和34)年の伊勢湾台風による大災害が転機となり、1968年新設の名古屋西部木材港に移転したことで大きく減少し、デリックも次第に姿を消していった。しかし2000年代初め頃までは堀川を中心に新堀川、中川運河沿いに計15基(うち8基現役)



木材で溢れる堀川とデリック
(1957年頃、名古屋港管理組合所蔵)



運河沿いのデリック所在地 (2002～2004年時点、国土地理院地図に加筆)

2023年現在、名古屋市内の運河沿いに立つデリックは堀川沿いの1基だけとなった(写真左)。1983(昭和58)年に設置した2代目のものである。支柱となる直径420mmの鋼管にブームと呼ばれる腕木(鋼管)が2本取り付く、堀川では広く普及していた形式である。デリック脇の川面には今も丸太が係留され、隣接する機械室にある電動機とワイヤーロープ付きのウインチによって、いつでも陸揚げできる状態となっている。稼働可能な状態を保つこの現役デリックは、かつての堀川の木材産業の賑わいを記す唯一遺された記念碑的機械ともいえ、堀川散策の船旅、街歩きの楽しみの一つともなっている。

(天野武弘)